



NO. 14 1995. 3

株式会社九州地域計画研究所



対馬の国、厳原町豆酸(つつ)の豆酸崎というところで「魚つき保安林」という、ちょっと古い看板を見つけました。(本文6頁)

も く じ

〈NETWORK・ネットワーク〉

2. やぶにらみ九州論9 お客様にサービスする地域が発展する
5. 生鮮3品に未来はあるか 家計における消費額激減
6. 対馬、厳原の魚つき林

〈見・聞・食〉

8. 町並保存から村並保存運動のステップとして 愛媛県内子町「石畳の家」
9. 高齢者に細やかな配慮が大切 シルバーハウジング視察
11. 食場日誌

〈近 況〉

11. 川下からの地域づくり～地域ゼミ・荒川三千男氏～
13. 私の近況 阪神大震災情報・うらしま太郎その後・けがをして思ったこと
15. WACの地域単位クラブ「長寿社会のまちづくり研究会」が発足

〈本・BOOKS〉

16. 「地図の遊び方」今尾 恵介著

お客様にサービスする地域が発展する ～住民本位のまちづくりかお客様本位のまちづくりか～

〈地域貿易収支の赤字馴れは問題だ〉

最近、過疎地域のことで2度考え込まれることに会った。ひとつは、過疎地の行政の人々が、地域の収支を全く頭に入れていないように思えたこと、ふたつ目は、近い将来に税の再配分構造が変わらざるを得ないのに、そのことに無頓着なことである。

国際間ではいつも輸入と輸出の差、貿易収支が問題になっているが、国内ではあまり問題になっていない。私は25年くらい前に隠岐の国の地域計画を手伝わせていただいたとき、これならば島経済として移出入差が出せるかも知れないと思って取り組んだことがある³⁾。その理由は、移出入の赤字が過疎化の根源だと思ったからである。

※このとき、どうしても収支の辻褄が合わなくて困っていたところ、民宿の主人に「この島は仕送り収入が多いですよ。それは計算されましたか」といって膨大な仕送り収入推計値をつぶやかれて、悩みが氷解した。

私が九州で見た過疎の町では、政府サービス生産（電気・ガス・水道・公共サービス・公務）と建設業が最も大きい産業となっていた。

過疎地が全国平均と同じとなる必要はないので、バランスの違いに文句をつける気はない。ここで問題にしたいのは、収入が政府サービスや建設業などといった、所得再配分（税金及び公共投資）の業務に片寄っていることである。この町でも多くのものを輸移入（他地域から買って金を払うこと）をしてい

・政府サービス生産者所得	25.6%(7.4)
・建設業	25.5%(9.7)
・卸売・小売業	10.3%(15.5)
・水産業	9.7%(—)
・運輸通信業	9.6%(6.9)
・サービス業	6.0%(17.0)

※（ ）内は全国の比率

る。中でも最も頭の痛い移入は大学進学に対する仕送りである。

移出（他地域に売って金をもらうこと）をするものは水産とサービス業のうちの3割ぐらい（民宿の主人に聞いたところでは、民宿や飲み屋の売上げの6～7割は、土建業などで来る都市の人や地元の人たちで占めていて、観光客は3割ぐらいだろうということであった）とみられる。一方、移入は教育費以外にも農漁業のための機器や飼・肥料、農薬、養殖・漁業用の薬品、書籍、文化、知識労働（前記のように、せっかく公共事業などで移転されてきた建設業収入などから、知識労働部分は都市側へ外注し、都会から来た人に払っている）、衣料品、食料品等々多岐にわたる。

豊かな自然や郷土色豊かな食べ物（正に逸品といえる魚料理が安い値段で食べられる）、ゆったりした佇まいがあるのに、それが都市側へ売れていない。この都市側にはないものが売れるようにしないと、もし税金による所得再配分が弱まったらどうするのだろうか。これらの構造的対策は効果が出るまで少なく

とも10年にかかるのに…と心配せざるを得なかった。
 〈税の再配分比率の見直し論が必ず起こる〉

阪神大震災の記事の中で、「長い間、都市の人口密集地に対する公共投資が、過疎地に比べて1人当たり何分の1かで、少なすぎたのが被害を大きくした」というような意味のことが出ていた。この記事は公共投資依存を続けてきた過疎地にとっては大変なことを意味している。

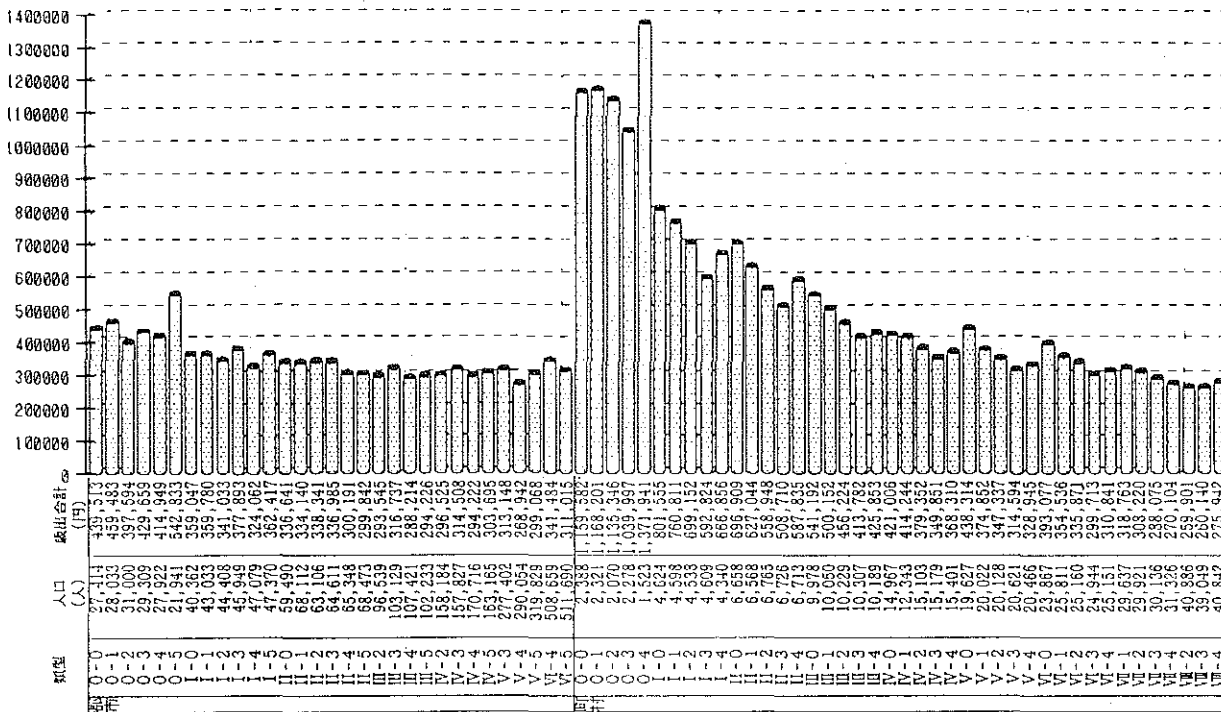
私は大震災という形でこんな考えが出てくると思ったことはないが、いずれ見直し論が出てくるし、地方は交付税依存、公共投資依存から脱却しなければ

ならないときがくると考えていた。その時考えていた理由は、大都市の都心部は過疎地と負けないくらい高齢社会であり、人口もかなり多いので納税人口が減っていく過程で「都市への配分を増やすべきだ」という主張が、選挙の票の圧力も含めて表面化すると考えていたからである。

ものごとの対策というものは量（例えば高齢者の人数の多さ）に対して行われるのであって、比率に対して行われることはない。高齢比率がいくら高くても、人数が少なければ問題は少ないとみなされる。私の予想では、「2~3年後の予算編成時に問題となり

市町村政にしめる人口1人当たりの金額

資料：「類似国体別市町村財政指数表」（平成6年3月）



だし、少し配分を変えることが起こり、選挙法が変わったことによる都市側への議員配分が増え出すと、福祉財源問題と相俟って、税や公共事業などの地方への重点配分が急速に解消され出す」というものである。

ところが、阪神大震災がそれを一層加速させるかも知れないのである。

〈地域づくりには、ハード投資だけでなく、ソフトシステムへの投資を〉

現在の市町村の予算規模を、人口1人当たり歳出額で比べてみると、大変な差があることが分かる。このことは、過疎地では広い地域を少ない人口で守っていかなければならないのであるから、当然のことではあるが、都市側の人々はそうは思わなくなるかも知れない。また公共投資といって建設工事が地方に厚く配分されていることに対しても合意を得にくくなるかも知れない。

これはある漁村で聞いた話であるが、10余戸の漁家のいる漁港を10数億円の予算で改修している。地元でも、本当に意味があるのかという噂話が流れていたようだ。この投資によって、漁業の生産性は上がり、土木工事によって生産誘発効果も起こるかも知れないが、ハード施設づくりは多くの場合一過性のものである。それに対して、経済活動の組織づくり（具体的にいえば会社づくりのことで、ソフトシステム投資でもある）に用いられたら、その組織はその資源を使って年々生産を上げることができる。民間企業というものは、多くても1人当たり300~500万円くらいの資本装備で、年々の給与を稼ぎ出し、さらに利益を積み立てて資本を強化していつている。

ハードインフラへの投資と、ソフトシステムへの投資の目的、もたらす効果が同じでないことは言う

までもない。しかし、目標とするものは、地域振興であることは変わらない。要はハード偏重では、長期的な地域づくりができないということである。

地方が税などの再配分への依存度を下げするために、地域の特産品をつくって都市へ売るか（製造業）、都市の人たちに金を持ってきてもらうこと（観光業）しかない。

〈10年後のために、住民本位ではなく、お客様本位のまちづくりを〉

市町村の行政の人たちと会うと、あるいは計画書などを見ると、いたるところに「住民本位」と述べられている。そして多くの場合が、市民会館、町民グラウンド、公園などといったプロジェクトが目白おしに並んでいる。こんな緑の多いところに、なぜ新しい公園があるのだ、と思うようなケースが多い。

仮に市（町）民会館に10億円かけたならば、それを資本にして企業を起すとすれば（1人当たり300万円の資本装備率とする）、約300人を雇用する会社ができ、年々生産を続けながら資本を増やしていく。

おそらく、地方で誘致している工場を見ても、従業員1人当たり300万円の投資にはなっていないだろう。この1人当たり300万円という投資は町民センターであろうと工場であろうと生産誘発効果に大差はないと考えられるので、年々の生産を続けて給料を払いながら増殖するという活動が、オマケとして付け加わることになる。

こんなにうまい産業があったら「教えてくれ」と言われるかもしれないが、ハード投資のみでは地域が長期的に活性化しないということを言いたいのである。（次号はそれについて考えてみる）

住民本位よりはお客様本位の地域づくりを進めてほしい。
（糸乗 貞喜）

生鮮3品に未来はあるか

家計における消費額激減

昨年12/30の日経新聞によると、94年の全国の流通業就業者数（1～11月）のうち、販売に従事する「自営業とその家族」は前年同期から9万人減少したとされている。この大幅な減少の理由として、ここ数年の価格破壊型販売や通信販売などの新たな販売形態が注目を集め、これらのトレンドに「乗り遅れた」商店が淘汰されていることが挙げられている。

これに関連する話として、最近の小売業、特に食料品小売業をめぐる社会的な動向について勉強する機会があったのでいろいろ調べてみた。

〈生鮮食品の消費が減少、調理食品や外食は増加〉

家計調査年報（総務庁）で全国の勤労者世帯あたりの消費支出の推移（1975～92年）をみると近年生鮮食品の消費支出が大きく減少していることがわかる。生鮮3品（生鮮肉、生鮮魚介、生鮮野菜・果物）の1カ月平均消費支出（実質）は1992年に22,620円となっており、対75年の比率で約7割に落ち込んでいる。

これに対し大きく伸びているのは調理食品や外食などである。調理食品は対75年比で180%強、外食は140%弱となっている。これらは支出額においても合わせて約20,000円（1992年）となっており、生鮮3品とあまり変わらない金額にまでなっている。

これは戦前～戦後にかけて我が国で栄養摂取のパロメータといわれてきた生鮮3品を自分で買って調理して食べるという食習慣が徐々に失われつつあり、調理食や外食で加工生鮮食品を賄うことが普通になっていることを示している。

食料品の消費支出の推移（1世帯当たり月間・全国）

	1975年	1980年	1985年	1990年	1992年
消費支出	320,893	306,075	325,269	348,314	352,820
	100	95.4	101.4	108.5	109.9
食料品	96,600	85,148	83,561	84,026	83,445
	100	88.1	86.5	87.0	86.4
生鮮3品	31,176	25,699	24,115	23,130	22,620
	100	82.4	77.3	74.2	72.6
生鮮肉	9,462	7,711	7,236	6,695	6,489
	100	81.5	76.5	70.8	68.6
生鮮魚介	8,215	6,952	6,427	6,126	6,197
	100	84.6	78.2	74.6	75.4
生鮮野菜	8,112	7,014	6,429	6,766	6,470
	100	86.5	79.3	83.4	79.8
生鮮果物	5,387	4,022	4,022	3,543	3,464
	100	74.7	74.7	65.8	64.3
調理食品	4,348	4,866	5,429	6,930	8,016
	100	111.9	124.9	159.4	184.4
外食	8,906	9,544	10,819	12,446	12,429
	100	107.2	121.5	139.8	139.6
米類	8,831	7,207	6,862	5,222	5,002
	100	81.6	77.7	59.1	56.6

※価格は1975年換算（家計消費のデフレータによる）

〈食の変化は社会の変化を反映〉

こうした食の変化は我が国の世帯形態の推移や社会のトレンドに対応しているとみられる。例えば、女性雇用者比率の上昇（1960年40.8%→1992年75.4%、総務庁「労働力調査」による）は、共働き世帯の増加、女性の独身期間の長期化などを生み出し、女性が料理の手間を少なくしたいという気持ちを高めた理由の一つになろう。また、以前「よかネット6号」でも紹介したように、社会における単身世帯の増加は、1人分の量しかいらぬ食生活へと変化していった。

〈トレンドに対応できたコンビニエンスストア〉

こうした社会変化に対応した販売形態として、ファミリーレストランを脅かす存在にまで成長したといわれるコンビニエンスストアが挙げられる。

「日経ビジネス」（94年10/4号）では、昨年夏に開店した販売構成が最も効率的とされたコンビニ店舗の例が紹介されている。これを見ると主な商品は日用品、調理食品で生鮮3品は全くみられない。

独り住まいで調理が苦手な若者や、仕事で帰宅が遅くなり「ちょっと足りないものを買に行きたい」主婦にとって、気軽に立ち寄れるコンビニの調理食品コーナーは、非常に便利なものである。コンビニの調理食品は生鮮3品のもつ新鮮さが無く加工した分割高であるが、手間がかからず、家に近くて、深夜でも商品が手に入る便利さは、新鮮さや安さを上回る。

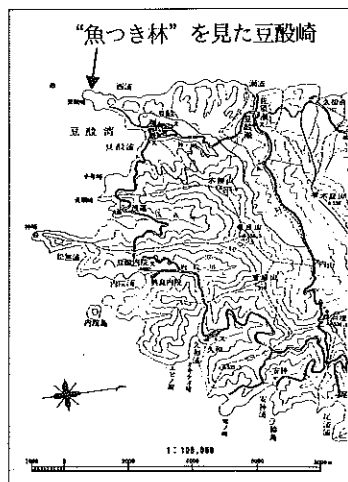
最近のコンビニ店には、公共料金支払いサービスや興行チケット手配など、窓口サービスを取り扱う店舗もみられ「便利さ」の印象づけに一役かっている。実際、20代の男性の7割が、2日に1回はコンビ

ニ店を利用するともいわれており、昨今の我が国の「地域密着型商業」になりつつあるのかもしれない。
〈今後の生鮮食品の将来は〉

それでは生鮮食品販売の将来はいかにという話になる。現状では、冒頭で触れたように生鮮食料品流通の大きな部分を占めるとみられる「自営業＋その家族」型の小売店従業者数は大幅に減少している。

しかし、生鮮食品の特性である「新鮮さ」「安さ」を武器に、お客さんに「得した」と思わせる買い物をさせる朝市（農山村の生産者の直販）などは「食べ物好き」の間でなかなか人気がある。

〈対馬、巖原の魚つき林〉



対馬、巖原町南端
豆酸（つつ）

「木に縁って魚を求む」とか「魚の木に登るが如し」という、「ことわざ」は、「絶対に目的を達せられないというたとえ」と説明がついている。そのこと

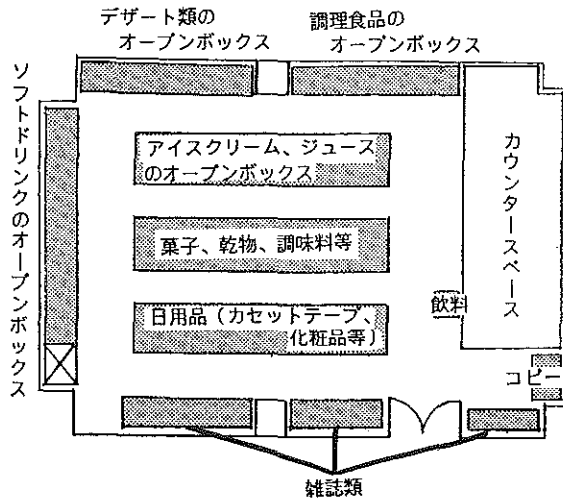
わざと背く看板を見つけてうれしくなった。魚は森によって育てられるということ、特にブナ林は魚のための栄養がはぐくまれるという話は聞いていたが、見たのははじめてである。この看板のところは、お義理にも林とは云えず、草地であったが、この豆酸崎一帯は対馬でも最高の漁場のひとつである（ブリ、タイなど）。対馬へ一度行ってこの看板を見、最高にうまい魚を味わっていただきたい。

おわりに「魚つき林」の解説を引用する。「保安林の一つである。魚付林の効果として、①豊富に栄養塩類を流したり有機物を供給してプランクトンの繁殖を促す、②森林が海面に落とす影が魚類の休息・産卵に適した環境をつくる、③森林があることによって、魚類の嫌う刺激性の反射光線が生じない、などが挙げられている。魚付林には古くから大切に守られてきたものも多かった。」

（平凡社 世界大百科事典）

（糸乗 貞喜）

売場構成を効率化したコンビニエンスストア



また、町中でも活気のある生鮮食品専門の市場は数多くある。そういうところでは、お客様の好み、旬の食べ物、お客様の体調に合わせた調理法などに詳しい店主がいたりして、安心して買い物ができる。このことを考えると、生鮮食品は特定顧客型の販売に適した商品であり、コンビニ型の不特定多数型の販売とは相容れないものであることがわかる。これらの型の販売に係わる小売店では、生産者とも顧客とも日頃の行き来や情報交換が重要であり、社会変化に敏感に対応した販売が求められるものと考えられる。

したがって今後の生鮮食品販売は、従来と同様に他商品との共存によりお客様の便利さを追求した「買回り便利型」に値段、品物の質でお客様を引きつける「買い求めこだわり型」によって活路を見出す以外にはないのでは、と思われる。これに消費者情報、生産者情報の収集が必要条件として加わる。

〈醤油、ワサビ、箸を笑って包んでくれる大黒町市場の魚屋さん〉

以前、この誌面の食場日誌のコーナーで、長崎市の大黒町市場の魚屋さんのことを紹介したことがある。列車の道中となる肴を求めて市場に寄ったとき、目を奪われたアジ刺に箸、醤油、ワサビをつけてスマイルで手渡してくれた魚屋のご夫婦などは、「特急列車の乗客で肴を欲しがっているお客」という限られた顧客に臨機応変の特定サービスをしてくれたようなものである。サービスを受けたい側としては口コミで噂を広げたいような、忘れられない生鮮食品屋さんである。
(尾崎正利)

勉強会のお知らせ

「札幌市住宅基本計画と それを取り巻く諸問題」

講師：眞嶋 二郎先生
(北海道大学 工学部建築学科)

- ・日時 3月16日(木曜日) 18:00～
- ・場所 ㈱九州地域計画研究所
7階会議室
- ・連絡先 TEL.092-731-7671
FAX.092-731-7673 (富重)

参加を希望される方は、上記宛にTELあるいはFAXでご連絡下さい。

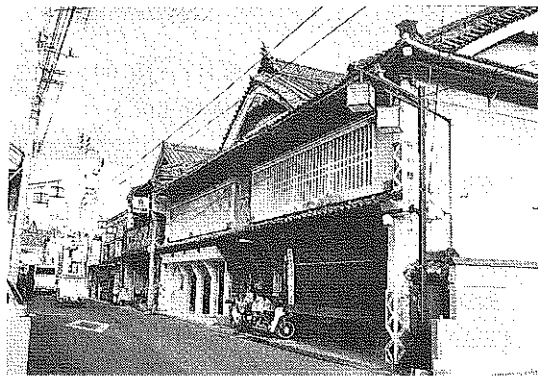
町並保存から村並保存運動のステップとして
愛媛県内子町「石畳の家」

昨年12月の始めに、某市において現在進めているまちづくり委員会の皆さん方と一緒に先進地視察の一つとして愛媛県内子町・五十崎町に行ってきた。

ここでは内子町で取り組まれている村並保存の一環として農家を改修して民宿経営している「石畳の家」について紹介させていただく。

〈村並保存への経緯〉

内子町と言えば、今ではノーベル文学賞受賞者大江健三郎氏のふる里として有名だが、明治の初めには、櫃の実から創る木鐮の産地として栄え、その製品は色鉛筆等の文具、化粧品、医薬品など多岐にわたり、広く海外まで輸出されていたとのことであった。この当時の面影を残す町並が旧街道沿いに残っており、昭和47年に文化庁が第一次集落町並調査にここをリストアップしたのをきっかけに、町並保存の気運が芽生えはじめ、八日市護国地区(750m、3.5ha)が昭和57年に「重要伝統的建造物保存地区」に指定されたこと



栄華を誇った木鐮屋敷の町並み

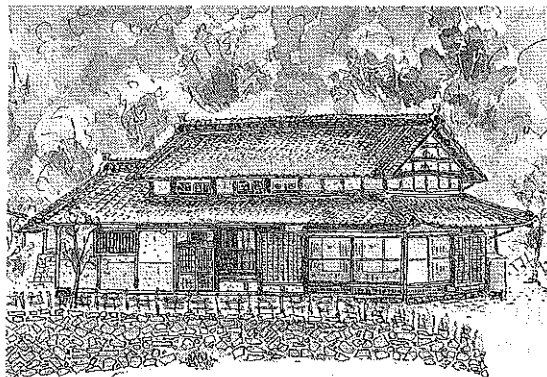
のであった。以後、保存修復が進められ、今日ではこの町並の情緒を求めて多くの観光客が来ている。

一言で町並保存といっても当初から係わってこられた岡田企画課長の話を聞くと、保存地区に指定されると勝手に自分の家を扱えないのであるから、住んでいる方に納得してもらうのに膝づめで交渉されたとのことであった。20年間に及ぶ町並保存が一段落ついたところで、岡田課長が今取り組んでいるのが、農家の田園風景を残しながら村の活性化を模索する運動としての「村並保存」である。これは単に景観だけの保存ではなく、後継者もいなく失われていく過疎地域での活性化策としての息の長い挑戦のように感じられた。今年、若い職員をドイツへ研修に行かせるなどして、ノウハウを蓄積しているようであった。

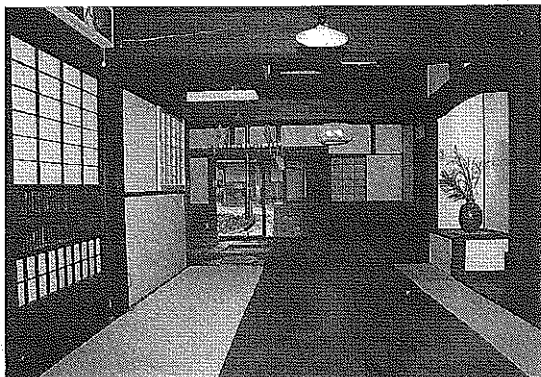
〈町のゲストハウスとしての石畳の家〉

町の中心地から北の谷間に沿って山道を車で約30分ぐらい走ると石畳の家に着く。我々が到着すると玄關から何気なく挨拶され、迎え入れてくれたのが、この民宿の経営責任者である岡田課長さんであった。

板の間の角に切ってある囲炉裏を囲んで、岡田さ



「石畳の宿」は古い民家を移築し宿泊施設とした



畳の間と囲炉裏の板の間

んが町の成り立ちや地域づくりなど短い時間にいると話をして下さった。地域づくりはフルマラソンと似ており、スタートラインに立つには数年にわたってトレーニングを積む中で体力と知力を養って参加するものであり、忍耐がよく大きな目標に向かって一歩々進んで行かなければいけないこと、また、50万円の予算で石畳の集落の人々が自力で水車を創り、この苦勞話が町の劇団で演じられていることなど面白い話を聞かせていただいた。

この石畳の家は現地より上の方にあった民家を移築し、民家保存に詳しい建築家に設計してもらい、半分以上は増・改築したものである。今はまだ集落の中で少し目立っているが、時間がたてば集落の風景に馴染んでくるであろうと思われた。ただし増・改築費用に約1億ほどかかったとのこと。

事業主体は町であり、宿泊客のお世話は集落の奥さん達がローテーションを組んで行っているとのことであった。宿泊費用は8,000円(朝、夕食付き)とリーズナブルであり、地域の奥さん達たちとの会話も心地よいものであった。町に来られるお客さんに

はできるだけこの宿に泊まって頂き、課長さん自ら接待されるとのことであった。課長曰く「町には誇れるようなゲストハウスがないとダメですよ。…」

贅沢を言わしていただければ浴室がもう少し田舎風であっても良かったのではないかと思った。

これから「石畳の家」を核として、石畳集落が村並保存の発信地となり、その風景をいつまでも残していってくれることを願いたい。(山田 龍雄)

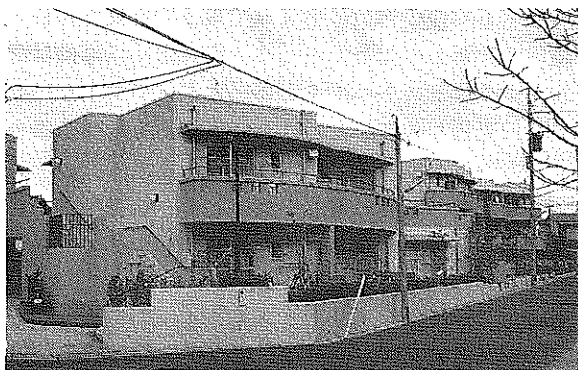
高齢者に細やかな配慮が大切

シルバーハウジング視察

今回は、九州では数少ないシルバーハウジング[®]の1つでもある北九州市宮竹末団地を視察したときの模様について報告します。

※昭和63年に建設省・厚生省の連携に基づき、生活指導・相談・緊急時の対応等のサービスを提供するLSA(ライフサポートアドバイザー)を近接あるいは隣接させた高齢者住宅。

場所は、八幡西区若葉町で、北九州都市高速黒崎インターチェンジから車で約10分の住宅地内にある。この団地は、内井昭蔵氏という有名な建築家の設計ということで期待していた。この団地は、約435戸の建替え団地であり、その北側の一角に約30戸のシルバーハウジングと、デイサービスセンターが位置している。南側から団地に入ると中央部を南北に水路が通っており、湾曲した住棟がそれを囲むように、お互い向かい合って配置されている。蛇行した水路脇の小道を進むと、所々にベンチや水路の上にかかる石橋、下には水遊びのできる場所などがあり、歩いていて楽しい空間となっている。進行方向には必

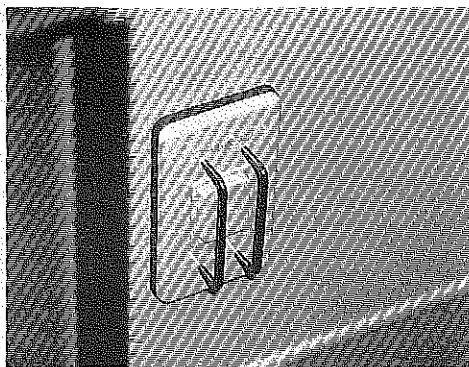


シルバーハウジングの外観

ずアイストップとして建物が見えるようになってい
る。建物の外観も階段やバルコニー、手すり、ひさ
しにいたるまで細かなデザインが施されており、そ
れらも独特な空間構成の部品となっている。

シルバーハウジングの敷地内に入ると、住棟が中
央の花壇を取り囲むように配置されている。2階は各
棟がデッキで結んであり回遊性のある空間となっ
ている。玄関横には縁側が設置されており、住んで
いる方々のだんらんの場となっている。このシルバ
ーハウジングのLSAの方に、1階の1DKの住戸内を見
せていただいた。室内に入ってLSAの方に、この住
宅の良い点、悪い点を色々聞いていたうちに、シル
バーハウジングにおける検討課題がいくつか挙が
ってきた。

- 玄関のドアは引き戸となっているが防火上のため鉄製であり少し重い。
- 浴室に入るところで段差がある。
- 浴室の扉が折戸となっており、中で人が戸にもたれて倒れたときは外から押してスライドできず、開けることができない。
- 浴室内の緊急通報ボタンが洗い場の背中側に設



設置場所の悪さから誤操作が多く、ガードする金
具をつけている浴室内の緊急通報ボタン。しか
し、指の不自由な方にはこの金具が邪魔だとい
うことだ

置してあり、誤ってボタンに触れることがしば
しばあった。

- 入浴は高齢者の楽しみであり、浴室は外に面したところを希望している。
- 洗面所や台所の水洗金具はレバーハンドルとなっているが、水量の調整が難しく、LSAの方の指導が必要であった。
- オール電化となっており、コンロ部分は電磁調理器となっているが、切っても余熱が残るため危ないことがある。
- 通報連絡装置が床から高いところに設置されており、立って話をしなければならず不便である。
- 高齢者は床の間を求める傾向にある。
- LSA住戸に接している相談室も10畳分くらいの広さしかなく、40名もの居住者に対しては狭く使いづらい部屋となっている。また結露が激しく壁紙がすぐ傷む。
- LSA住戸から各住戸へのアクセスが悪い。

住戸内部については、『高齢者への配慮は「生活リ

ズムセンサー」や「緊急通報システム」を設置しているから十分だ』というような感じを受けていたが、LSAの方の話を聞いていると、高齢者には設備などの、ほんのちょっとした高さや設置位置の配慮が大切であると思った。

前号で、住む側（高齢者）、つくる側（設計者、行政）、LSAの三者がそれぞれ理解し合うことの大切さを述べたが、具体的には、計画段階で設計者と高齢者あるいは、設計者と、福祉課職員などとの充分な話し合いの場を設けることが重要であると思う。

（宮原 真一）

食 場 日 誌



カキフライにして
食べたい！

・1月×日 能古島に別荘を持っている青木先生からのお誘いを受け、所員6人で出かけることになった。約束の能古島行き12時15分ごろには、雪が降りだしてきて半分あきらめ気分で島に渡った。少し天候が持ち直したので、予定どおりカキとりと山芋掘りを決行した。別荘から歩いて10分ぐらいの海岸に、石にへばりついた自生のカキがいて、ドライバーと五寸釘で無心にカキとりを行った。生で2つ程食べたみたが、海水の適度な塩加減が良く美味であった。ま

た時期的には早かったがアサリもパケツ1/3ぐらい収穫できた。

カキとりが一段落し、次は山芋掘りである。青木先生が予めつけておいた印が見つからず、掘る場所を探すのに一苦労した。見つけた後は、無心で掘り続け、1m程掘ってやっと山芋の先端に辿りついた。山芋掘りはまさに自然との戦いであることを認識させられた。

海の幸と山の幸を別荘に持ちかえり、味噌仕立てのカキ鍋、あさりの酒蒸し、酢ガキ、擦り山芋などで簡単な宴会を行い、家路についたのは夜の9時ごろであった。福岡市内からフェリーで15分ぐらいのところで、このように自然と戯れる環境があることのがありがたさを感じた一日であった。 (た)

・2月×日 「しじみでまちおこし」という仕事に携わっている。今回は宍道湖へ行ってきた。名物「もぐり寿司」を食べる。ちらし寿司風の弁当に焼いた小粒のしじみが、これでもかとトッピングされており、ご飯の中にも入っていた。特に美味しいというわけではないが、ここでしか食えない、というありがたさも手伝って少し感動。松茸もそうだが、希少価値が味をつけることも多い。人間は不思議だ。(き)

川下からの地域づくり

～地域ゼミ・荒川三千男氏～

1月26日（水）に行われた地域ゼミは「ミニ独立国戦略」と題して、田ノ四箇（たのしか）共和国総領事の荒川三千男氏に、商店街の活性化に始まる地域おこしの話をさせていただきました。

田ノ四箇共和国とは、実は福岡市にある四箇田（し

かた) 団地内の15店の商店街組合のことで、そこがミニ独立国をつくったときに「四箇田」を入れ換えて名付けたのが「田ノ四箇共和国」です。多くの人には「しかた」と聞いて「しかたない」くらいしか浮かばないところですが。

ところで荒川氏は商店街の人ではなく、コーディネーター(これが本業)としてかかわり、共和国の「総領事」と呼ばれるようになったということです。以下、ゼミでの話をかいつまんで紹介します。

〈商店街の活性化と共存共生〉

- ・近くにスーパーが出来て商店街が押され始めたとき、3つの競合策をとった。
 - イベントを行う(ある町の肉のジャンボ市は土日だけで10日分売っている。)
 - “住民のふるさとづくり”といった大義名分を掲げ、地元のための店づくりをし、広く宣伝活動を行う
 - 普段からボランティアしておく(大型店の方が安いけど世話になってるからあんなのところで買うという状態にする)

これによって売上げは回復した。

- ・隣の商店街の八百屋が「うちの売上げが落ちた」といって喧嘩になり、“共存共栄”は難しい、“共生”を目指そうと考えた。

〈顧客管理の川下POSシステム〉

- ・商店街活性化のためにスタンプシールを配る所があるが、儲かるのはスタンプ屋だけ。そこに売上内容の情報は何もない。
- ・24時間営業、年中無休というのは「もうこれ以上営業できません」ということ。固定費だけが上がればいずれつぶれる。
- ・コンビニで導入されているPOSシステムは、何才

台の男性または女性が、いつ何を買った、という情報がレジでインプットされる。しかし客が誰であったかは分からない。

- ・顧客を把握し、誰が、いつ何を買った、という情報を得るのが「川下POSシステム」。会員制で、磁気カードを作り、銀行口座まで把握。お客様への還元は口座にキャッシュバックする。
- ・川下POSシステムを導入したあるスーパーは、坪当たり売上額が、九州のスーパー平均6,600円に対し、18,000円になった。
- ・競合店の進出によって売上げが落ちてても、どの辺の客が来なくなったかが判り、対策を打つことが出来た。
- ・商店街活性化は、その後地方の活性化として期待されるようになった。

〈ハッピーリタイアコミュニティと300年住宅〉

- ・地方の活性化でどうしても残る問題のひとつは高齢化。退職金では死ぬまで生活できないし、老齢年金は頼りにならず、子供も面倒は見てくれない。そこで、老後も楽しく働いて給料をもらいながら暮らす自己完結のまち、「ハッピーリタイアコミュニティ」をつくらうとしている。
- ・そのほかバブル崩壊の問題点から考え出した300年住宅を、福岡市内に建設中。レンガ張りの外装型枠と発泡プラスチックの内側型枠の壁、水道管など設備関係はメンテのため全部外側に出すという方法。屋根は80年で葺き替える。
- ・物事をいかに遊びにするか。遊びがないと冷たさを感じる。笑いがあることは大事だ。
- ・商売成功のため忘れてはならないことは3つ
 - お客を起点に考えているか
 - 商売に直結しているか

○自分の哲学に反していないか

早口で情報満載で面白い荒川氏の話にやや圧倒されつつ、商店街の活性化にとどまらず、様々なことを考えさせられるゼミでした。

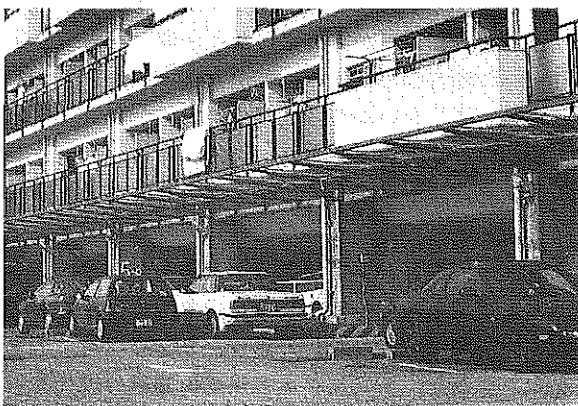
なお、川下POSシステムの「川下」は人名ではなく、物流の川下、つまりお客様の場を意味しています。
(伊藤 聡)

私の近況

〈阪神大震災情報〉

1月28・29の両日、自分のかかわった建物を見ておきたいと思い、現地調査に行った。震災後、「現地はテレビや新聞で見るのと全くちがいますよ。現地へ足を運んで見ておいてください。」というTELやFAXが入ってきていたので、とにかく行ってみようという気持ちであった。

私は、格好はいいが、壁のないピロティ様式の



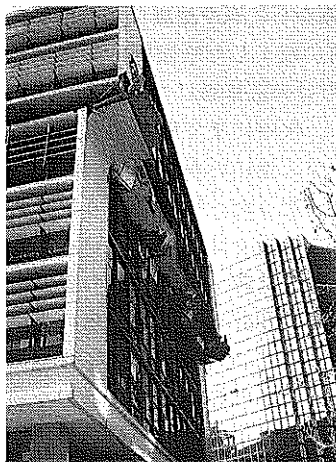
太い斜梁（筋交い）が4階の上のピロティにつけられていた

建物は嫌いである。見るからに風や地震に弱そうだから。ところが、16年前に竣工した吹田駅前の再開発ビルは4階の屋上が柱だけの駐車場になり、その上に住宅がのっかっている。吹田にまで阪神大震災の被害は及んでいなかったが、見にいかにいられなかった。行って見て大安心だった。写真のように巨大なブレース（斜梁、日本建築では筋交いといっている）が入っているし、地盤は着工時に自分の眼でたしかめている。この建物は設計当時構造担当の人に「この建物は、大地震が来てもビクともせず、1棟だけ残ったというような、格好の悪いものにはしないようにしてくれ。周辺は倒れていないのにこの建物が先に倒れるのも困る。周辺が全部倒れてしまった場合、最後にこれが倒れるような設計にしてくれ」と注文をつけていた。その頃にはもうすでに息が合っていたので、「わかりました。その気持ちを大切にしてい構造設計します。」という返事をもらっていた。現場に立ちながら、当時の会話を思い出した。

阪神大震災でのテレビや新聞との違いということ



日頃颯爽としたハイヒールやスカートの女性たちの目立つ阪神梅田駅だが（'95. 1. 29 AM 8:30）



途中階が横へ押されるようにひしゃげている神戸市役所旧館

で述べると、テレビなどは「点」をポツンポツンと見せていく一次元の世界というわけだが、現地では歩いている間中（何時間も）道路に倒れた家や1階のなくなった家などが、全面的に延々と続く4次元の世界であった。高架道路の倒れたところにしても「ここだけ荷重が大きかったからです。」などという訳知り顔の解説を聞いていたが、橋脚の壊れているのが神戸まで続いていた。ついでに避難所について言うと、覗いて見たりはしていないのではっきりと言えるわけではないが、テレビは人が集まっていないと絵にならないので、忙しく立働いているところを映していたが、私の通ったところは、どこもひっそりと淋しい気配であった。

私が少し手伝わせていただいた長田神社のところの再開発の建物まで行ってみたかったが、行けなかった。私のまわったところは、28日が吹田・芦屋・芦屋浜団地・青木。第2日目は阪神梅田駅・青木（バスで）三宮周辺へ南側を歩いて元町辺り・西へ向かって湊川神社・新開地・湊川公園・地下鉄の上の道路陥

没現場・さらに西へ行ってから南へ下り兵庫駅へたどりつく・それから東へ三宮まで・三宮駅北側の飲食街は壊滅状態で北側を大きく迂回して三宮駅北へ・三宮JR代替バス乗場・バスで新神戸から山手幹線でJR芦屋・電車で大阪へ…というルートであった。その間、阪神の梅田駅を出てまもなく青い屋根（防水シートを貼っている）が眼につき出し、尼崎に入ると壊れている建物が目立ちはじめ、西宮からは大変な街が続いて、JRで芦屋・西宮を離れるまで続いた。

どこを歩いても、大きな倒壊のあとばかりであったが、一様にとということではなかった。相棒と一緒に歩きながら、「テレビや新聞は“断層に沿って被害が大きい”といていたが、どうもそうではないらしいね」、「こんなにすぐ隣で構造線の影響が違うこともないだろうし」、「地盤のちがいによって、街区がちがったら被害もちがうのではないか」、「この辺は六甲山からの細い川があったんではないかなあ」、「元町は丈夫な感じなのに、新開地は大変だなあ」、「ひょっとすると、元町は元々あった台地で、隣は谷筋を埋めたのかな」、「なんとなく、元とか本とかいう古い地名のところが丈夫で、新とか開とかいった字のついた地名のところの被害が大きいのかな」などと感想を話し合いながら見て歩いた。

ひとつだけふれておきたい建物がある。ガソリンスタンドだ。不思議なことに、ガソリンスタンドはほとんど壊れていなかった。私はガソリンスタンドの建設を何か所か手掛けたことがあるが、そのとき巨大な基礎を作らねばならないので「こんなにまで大きい基礎がいるのか」と思ったりした。神戸の街を歩きながら、ガソリンスタンドの基礎は役に立ったのだなと思った。

気になっている方がおられるかもしれないので、最

後に蛇足をつけ加えると、都心の路上や地下街での生活者は、公園や建物脇などに身を寄せていた。避難所にはやはり入れない（世界？が違う）のだろうか。食べものはあるにしても、以前より一層寒い暮らしのようであった。（糸乗 貞喜）

〈うらしま太郎その後 ほか〉

高齢者疑似体験プログラムの体験者や行政の福祉担当者の方々を募って“長寿社会のまちづくり研究会”の呼びかけを行いました。（社）長寿社会文化協会の地域の単位クラブとして、「うらしま太郎」の研修会開催、福祉に関する勉強会等の活動を行っていく予定です。（詳細別稿）

能古島に牡蛎とりに行くため高価な長靴（¥8,800）を買いました。もったいないので、今年は長靴を活用した遊びをしたいと思います。（う）

〈けがをして思ったこと〉

通勤の途中で自分の不注意により自転車にはねられてしまいました。左手首負傷。私の今までの人生の中でも上位にはいる不覚でした。左手の使えない毎日は身体の一部が使えないだけなのにも凄く不便なものです。でももっと実感したのは、使えなければそれなりに別のパーツを代用して何とかやっていけることです。足を使い、お尻を使い、頭を使い（行儀悪いです）、何とかなるものだなあと、実感した95年春、でした。それは痛いし、大変ですが、何とか工夫するものです。小さい子供やお年寄りも、私達が考えているよりも（大変だなあとか）もっと、自分で出来る範囲で楽しんでいけるのでは？手助けは必要だとしても、私達が口出し、手出ししすぎるのでは？それがボケを早まらせているのでは？と余計な事を考えてしまいました。（か）

WACの地域単位クラブ 「長寿社会のまちづくり研究会」が発足

高齢化社会については、在宅サービスの充実や福祉機器の開発、ヘルパーの養成等さまざまな取り組みがなされています。当事務所でも、高齢者の住み良いまちづくりのため、高齢者疑似体験プログラム「うらしま太郎」の体験研修会や、インストラクターの養成研修会を行ってきました。今後も「うらしま太郎」研修会を地域で展開したり、福祉に関する勉強会を行っていくため、（社）長寿社会文化協会（WAC）の地域の単位クラブとして「長寿社会のまちづくり研究会」の呼びかけを行ったところ25名の参加がありました。

2月17日に設立会を開催し、(株)服部メディカル研究所の服部万里子所長を交えて、WACの活動内容や研究会の取り組みについての意見交換が行われました。その中で、当面の取り組みとして、会員相互の情報交換、在宅介護の実態等の報告、「うらしま太郎」体験研修会の開催等を行っていくことになりました。

3月からは、毎月第4木曜日に当事務所会議室で研究会を行いますので、関心のある方は是非一度ご参加ください。

連絡先：歌丸、富重

（歌丸 星子）



地図の遊び方

今尾 恵介 著
けやき出版

本書は、雑学エッセイである。著者はベストセラー「地球の歩き方」を書いた人で、雑誌「サライ」でインタビュアーなどもやっているの、名前くらいは知っている人も多いと思う。

雑学といっても、1頁1ネタのようなチャチなものではなく、地図・地名という題材をもとに、地図が示す様々なお国柄、地図や地名の変遷でみる土地々の歴史などを、地図バカ（失礼な言い方だが）ならではの豊富な知識と読みやすい文章で綴っている。

旧ソ連の空港を記入していない日本の国後島地図や、空白のベルリン地図など、政治に左右されるちょっとまじめな話がある一方で、市川市市川一丁目、国鉄千葉駅前駅、ガンパロー村などの面白い地名・駅名がでてくると笑ってしまう。

由緒ある地名・町名を抹殺する地番整理や市町村合併へのささやかな申し立てなど、無駄なものは認めず、著者のいうところの「センスの無い」行政システム・行政感覚に対する批判もあり、この辺りに共感を覚える人も多いと思う。

一時期、陸地がほとんどない青一色の国土地理院地図の収集に凝ったという著者は、「こだわる人」「読みとろうとする人」であり、面白おかしく「眺める

人」でもある。この同居がエッセイとしての本書の魅力を十分なものにしてはいるのではなからうか。

廃止線が示された昔の地図にノスタルジーを覚える人には是非お勧めしたい。（北村 茂樹）

編集後記

福岡では、今だ8時間の給水制限実施中で、今年の梅雨まで続きそうです。しかし、この頃ではこの水不足の生活にも慣れ、それほど不便を感じなくなっています。このたびの阪神大震災で避難生活をされている被災者の方々の暮らしぶりに比べれば、2~3日風呂に入れないことなど何の苦勞でもありません。

冬場になり、所員一同若干食欲が落ちたせい、今回の食場日誌は2人のみの掲載で少々さびしいものになってしまいました。次号までには皆の食欲も戻り、新しい“うまいもの”情報をおとどけできると思います。（や）

よかネット NO.14 1995. 3

(編集・発行)

九州地域計画研究所

〒810 福岡市中央区天神1-15-1 日之出ビル6F
TEL 092-731-7671 FAX 092-731-7673

(ネットワーク会社)

地域計画建築研究所

本社 京都事務所	TEL 075-221-5132
大阪事務所	TEL 06-942-5732
名古屋事務所	TEL 052-962-1224
東京事務所	TEL 03-3226-9130